

県立高校入試改善検討委員会（第2回） 会議録

- 日時：令和3年12月16日（木）14時00分～16時00分
- 場所：岩手県民会館第1会議室
- 出席者：佐々木修一 委員長、浅沼道成 副委員長、鎌田英樹 委員、小山田紳也 委員、今村久美 委員（代理出席：菅野祐太 氏）、梅津久仁宏 委員、千葉治 委員、高橋正浩 委員、松葉覚 委員、橋場中士 委員、岩館智子 委員、大柏良 委員（代理出席：佐藤尚 氏）、八重樫千晶 委員、村上智加子 委員、千葉仁一 委員（代理出席：侘美淳 氏）、山田市雄 委員
県教育委員会教育次長兼学校教育室長 高橋一佳
県教育委員会事務局学校教育室 学校教育企画監 中川覚敬
首席指導主事兼高校教育課長 須川和紀
主任指導主事 高橋直樹、菊地健、小野寺一浩
指導主事 川原恵理子
- 傍聴者：報道6人

○ 会議の概要

1 開会（高橋 主任指導主事）

2 教育委員会あいさつ（高橋 教育次長）

本日は、前回の委員会でもいただいた意見などをもとに整理した、県立高校入試改善の方向性や各論点について、委員の皆様にご検討いただく予定。特に、現行の推薦入試を踏まえて、生徒の多様な学びに対応し、各高校の特色や魅力を活かした入試のあり方についての検討を中心をお願いしたい。

3 委員長あいさつ（佐々木 委員長）

私は富士大学で入試部長をしている。大学入試でこの数年で大きく変わったのは、志望理由書を全国の大学で提出してもらうことである。今年度は、全受験者の志望理由書、高校からの調査書に目を通している。志願理由書などには、大学卒業後にどのように社会に貢献していきたいか書かれていて、一人一人の受験者から社会に貢献する人材になりたいという思いが伝わってくる。私が大学に入学するときには、志望理由書というものはなく、自分自身でそういったことを考えた覚えがない。委員の皆様も、同じかもしれない。今の子供たちは、自分の主張ができ、私はこういう道に進みたい、だから、こういう勉強をしているので富士大学を受けたいのだとはっきりと書いてくる。非常に頼もしく感じている。

少子化が進み、学校の小規模化も進んでいく今の時代は、少ない子供たちを、大切に、たくましく育てていかなければならない時代だと思う。学校の小規模化で様々な教育のメニュー、部活動などをすべて揃えることは難しくなってきたが、子供たちには可能な限り多様な活動させたいという強い思いを持って、先生方は教育に当たっていると思う。私達が育った頃とは、子供の様子も学校も大きく変わってきている。物事の考え方も非常に多様化しており、多様化する学校への期待に応えるように学校は様々な活動をし、子供たちも学校から飛び出して、いろいろなところで学びが成立しているという状況である。

子供たちが様々な学びをしている中、高校入試ではどのように評価してくれるのかということは大変気になるころだと思う。そのようなことも考慮しながら、検討して参りたいと思っている。

子供たちにとって、高校入試は大変重要な問題である。しっかりと検討を重ねて、よりよい改善を図って参りたいと思う。

4 議題（進行は、佐々木委員長）

（1）県立高校入試改善の方向性について

〔須川 高校教育課長〕

【資料1「Ⅰ 県立高校入試改善の方向性について」に基づいて説明】

〔佐々木 委員長〕

質問や意見はないか。

（なし）

（2）生徒の多様な学びに対し、各高等学校の魅力や特色を活かした入試のあり方について

〔須川 高校教育課長、菊地 主任指導主事〕

【資料1「Ⅱ 県立高校入試改善の論点」、資料2「Ⅰ 現行の推薦入試」、参考資料2「令和4年度岩手県立高等学校入学選抜推薦入学選抜実施概要」、参考資料3「岩手県における部活動の在り方に関する方針」、参考資料4「いわての中学生のスポーツ・文化活動のこれから」、参考資料5「新しい時代の高等学校教育の実現に向けた制度改正等について」、参考資料6「いわての高校魅力化ブランドデザイン for2031（岩手県立高等学校に関するスクール・ミッション）」に基づいて説明】

〔佐々木 委員長〕

質問や意見をいただきたい。

〔菅野 氏（今村委員の代理出席者）〕

現行の推薦入試で、選抜方法について特色を出している学校はあるか。

〔菊地 主任指導主事〕

不来方高校の芸術学系では、調査書、実績、面接の他に、適性検査として実技を行っている。

〔浅沼 委員〕

スクール・ポリシーは大学でもやってきたが、本当に岩手県内の各高校でどこまで実現できるのか、令和4年度中に策定し、それをもとに入試を行うのだから重要である。その辺りの見通しはどうか。

〔須川 高校教育課長〕

スクール・ポリシーについては、県立学校長会議で各高等学校長に説明するほかに、オンラインで副校長先生や校内の担当者にも説明をしている。

策定の期限は来年度としているが、各高校では、地域の方々とやり取りしながら進めているところが多い。現在の中学2年生の受検時には、各校の特色を理解した上で受検することを想定しており、来年7月までの策定は可能だと考えている。

〔浅沼 委員〕

文部科学省が求めるものをどこまで厳格に進めるのか。参考までに、大学では相当苦労して策定し、入試制度を変えた。

県土の広い岩手県で、定員が満たされていない学校が多い中で、これを進めるのは大変であり、岩手県バージョンがあってもいいのではないかという感想を持った。

〔村上 委員〕

部活動の推薦について、中学校で部活動全員加入ではないので、公平性に欠けるのではないかという論点と、スクール・ポリシーが策定されるので、それを中学生が理解して受検できるように、各高校の特徴が出せるような入試をどのようにすべきかということの2つの説明があったと思う。

現在、中学校で部活動全員加入としていない学校はどの程度か。以前、半分ほど聞いたことはあるがいかがか。

[須川 高校教育課長]

参考資料4の4ページのとおりである。

[鎌田 委員]

頭の整理が出来ていない。一方でスクール・ポリシーを策定する作業をし、もう一方で入試改善の検討をするということだが、関係しているのはわかるが、まず、各高校のスクール・ポリシーを決めて欲しいと思う。その上で、大まかな入試改善をとるのであれば分かりやすい。例えば、部活動推薦も学校の特色であるが、志願倍率が1倍を切っているから、それはいかなものかということも前提になっての議論だと思う。中途半端になるのではないかと思った。

論点として、例えば、推薦入試制度はどうなのかとか、推薦の要件に部活動は必要なのかどうか云々のところを議論し、スクール・ポリシーに関しては、各高校で出来上がったところで入試制度に絡めながらというのが、すっきりして議論しやすいのではないか。

[佐々木 委員長]

確かに、今までの推薦入試では、部活動や特別活動の実績などが中心だったので分かりやすかった。

しかしながら、今度は各高校の特色化を図る上で、生徒が「こういう特色があるから行きたい」というような、やる気というか、この学校で勉強したいという気持ちを汲み取るような入試ということになると、鎌田委員の言うとおりに、各高校のスクール・ポリシーがはっきりしない状況での検討はやりにくいというのも分かる。本委員会では、各高校のスクール・ポリシー策定と並行して検討を進めていくということではどうか。

[須川 高校教育課長]

各高校でスクール・ポリシーを策定していて、入試改善も同時進行というイメージを持たれたことと思う。

スクール・ミッションには、岩手県教育委員会として県立高校全体の進むべき方向性を記載している。それを受けて、各高校で今後10年間を見据えて、今までの実績にプラスして、どんな新しい価値を生み出していこうかという前向きな計画を作っていくことが第一段階と考えている。その次の段階で、各高校の特色を出すためには、どんな入試制度が必要か検討していくことになる。

この入試改善検討委員会では大きな方向性やあり方を示していただき、その上で、検査内容や選抜方法などについて、各高校がさらに工夫をしていくという形を考えている。

各高校でやることは、まず、スクール・ポリシーを策定し、今後は魅力化協働パートナーと見直しをしながら、より良いものにしていくことである。その次の段階で、入試のやり方について、今でいうところの推薦入試にあたる入試で、どんなやり方で生徒を募集していこうか考えていくことになる。

[小山田 委員]

この場では、スクール・ミッションやスクール・ポリシーではなく、入試のあり方について検討していくということではどうか。それが混乱しているように思う。

[須川 高校教育課長]

その通りである。

[佐々木 委員長]

イメージがなかなか湧かないと思うが、事務局は、各学校の特色化が図られた後の具体的な入試の仕方、選抜の仕方の意見が欲しいのではないか。大抵の場合、ゼロから組み立てるのではなくて、何かしらのモデルを参考にして考えるのがビジネスの世界ではある。

現在の大学のほとんどは、今事務局が計画しているような形になっている。浅沼委員からの話にも

あったが、すべての大学は特色化を求められ改革が行われた。特色化を図って、例えば、学部・学科の構成から、部活動、研究の仕方、教育の仕方など、独特のものを作り上げている。そして各大学では、様々なメディアを通じて宣伝している。大学では学校推薦の入試や自己推薦のAO入試があり、各大学の教育や研究内容、歴史などを受験者が自分で調べ、大学の授業見学や説明を受けに大学に来る。それに対応する教職員のアドミッション・オフィスという組織があり、手間暇をかけて志願者に説明をし、最終的に受験するかしないかを決めてもらってということをやっている。

高校入試もそれに近い形になるかと思ったが、どうなのか。

各大学では、志望理由書に書かれた内容により、場合によっては、志願者が希望するようなことは本学ではできないから別の大学を受験してはどうかということもアドバイスする。この内容ならば君はこの学部に入れば、志望を達成できそうだとアドバイスしたりとかしている。

そのような手間隙を高校入試でもかけるか、具体的なイメージは事務局にあるのか。

[須川 高校教育課長]

各高校が作るスクール・ポリシー、「三つの方針」は、中学生やその保護者、一般県民に見ていただくものなので、難解なことや概念的なことだけが書かれていても伝わらないと思っている。中学生が理解しやすい形で、それぞれの学校の特色を書いて欲しいと各高校にお願いしている。

また、文字だけでは分かりづらいので、各高校がA4判1枚で全体像が分かるような資料を作成し、中学生はそれを見ながら、自分がやりたいことがやれそうな学校を選んでもらいたいと考えている。

推薦入試に関して、今は学校長推薦という形だが、今のままでいいのか、AO入試がいいのか、大学のように両方があるのがいいのかなど、そういったこともこの委員会の中で議論していただければと考えている。

事務局として、論点について、今言ったようなことについて、委員から意見をいただきたい。

意見を出しづらいというのであれば、こちらからある程度の形を示すのも、1つの方法かと感じているところである。

[佐々木 委員長]

どのような観点からでも構わないので、質問や意見をいただきたい。

[山田 委員]

これからの県立高校がどうあるかということがグランドデザインやスクール・ポリシーとして出されているのだが、それらと高校入試がどう関係していくのか知りたい。グランドデザインが出され、各高校がポリシーを策定し、そしてその後、それに基づいた高校入試はどうなるのかということが、我々はどこを論点とすればいいのかということが、A4判1枚で見せて欲しい。高校入試のどこをどう改善していくのかが見えてこなかった。我々は一体どのようなことにどう意見を出したらいいのか。

[侘美 氏（千葉委員の代理出席者）]

同意見である。資料2の12ページに各都道府県の推薦入試や一般入試の実施状況、実施時期がある。これを見ると、もう推薦入試をやってない県があるのだということが分かる。

一番のポイントは、一般入試をどうするか、そして、推薦入試をどうするかという順序で考えるべきかと思う。多くの子供たちが関わる一般入試をどのようにし、それに先立って、特色ある子供らを推薦枠でという話になると思うので、まず一般入試を大事にすべきだと思う。

あとは、スクール・ポリシーと高校入試のあり方について、考えていくためには案やモデルがあれば、具体的に意見が出て、どんどん改善が進んでいくと思う。

部活動全員加入の時代でないので、推薦入試はなくてもいいのではないかと。紫波町には中学校が3つあるが、部活動をやらない生徒についても進路などを保障するようにとっており、学校では部活動に入らなくても入ってもいいという制度でやっていると思う。そういう仕組みに、岩手の中学校の

100%近くでなっているのではないか。世の中どんどん変わっているので、そういう状況を確認しなくてはいけないと思う。

[佐々木 委員長]

学力を測定して、調査書等で特別活動の様子とか人物を見るという従来の一般入試がやはり核になるという意見だった。推薦入試の方の定員を大きくするというのでないならば、やはり一般入試のあり方から検討すべきという意見だったが事務局ではいかがか。

[中川 企画監]

論点を明確にして欲しいという意見について、我々事務局としては、まだ2回目ということもあり、論点を絞り過ぎることで我々が議論を誘導してはいけないと考え、少し俯瞰的な議論になるような論点の示し方をした。本日の意見も踏まえ、次回では論点を絞っていきたいと考えている。

今意見をいただいた論点としては、やはり、1つは部活動が全員加入ではなくなったという中で、現在の推薦基準の部活動について、このままでいいのかということについて、問題点や現状のままでいいというような評価をいただければありがたい。

また、別の論点としては、学校長推薦ということについても、自己推薦やAO入試という言葉もあったのでその辺りについて、まずは各委員の知見から感想をいただければ、そこから次回の論点を抽出したいと考えている。

また、そもそも推薦入試は必要なのか、推薦入試の定員枠を広げた方がいいのかというような点についても感想や意見をいただければと思う。この後、議題が一般入試に移った時に、推薦入試のことに戻って意見をいただいても構わないが、もう少し、推薦入試について様々な立場から意見をいただきたい。

[佐々木 委員長]

これから、各高校からスクール・ポリシーが出てくれば、岩手県の高校の様子がガラッと変わると思う。先生方はかなり動かなければならなくなるだろうし、確かに学校は活性化すると思う。そのような中で、特色ある学校で学ぼうとする子供たちをどのように選抜するのか。そうすると、学力だけではないという考えも出てくると思う。スクール・ポリシーについては、まだイメージがはっきりしないところがあるが、各高校がそれぞれ特色化を図って魅力ある学校ができるということを前提にして考えるしかないと思う。

各高校が変わったときに、どのような選抜がよいのかということを考えて欲しいということなので、ここからは、事務局の参考になるように、その前提で自由に話をしていただきたい。

[八重樫 委員]

各高校の推薦基準について、部活動についての部分はかなり大きいと感じる。部活動は教育課程外の活動なのに、重点を置きすぎているのではないか。部活動で自己実現を図る子供たちもちろんいるし、現在の推薦入試でそのような多様な子供たちの学びが保障されていると思うが、かなり、部活動に重点を置きすぎている点がある。

それから、学校長推薦という話があったが、推薦基準で学校以外の活動を推薦基準で示しているところがあるが、学校外の活動を学校長がどのように判断していけばいいのか、中学校では判断で迷うところがあり難しい。

[菅野 氏（今村委員の代理出席者）]

今の八重樫委員の話に関連し、今回の入試制度の改革というのは非常に大きな影響を中学校に与えると私も思っている。高大接続改革で大学側で行われた改革は、高校に大きな影響を与えている。私は普段、大槌高校にいるが、大学入試が変わったことで総合型選抜を目指す子供が増えてきた。また、それにより、カリキュラムが探究的なものに大きく変わってきている。中学校の学び自体が、こうい

う入試制度改革によって変わっていく可能性があることも踏まえて考えていく必要があると思う。

その中で、現状は学校長推薦による推薦入試が行われているが、今後は、多様な学びが行われ、特にも、部活動が必要なくなり、社会教育に求められることが大きくなると感じている。そうした時に、学校長や教職員が生徒の学びをすべて管理することが難しい時代に入っていき、生徒たちが自分で受けたいと思っている学校を受けられる自己推薦入試ということ、本丸にしていくことを考えなければならないと思う。

ただ、総合型選抜をみていて思うのだが、その準備のための学習が生徒たちにはすばらしい学びの機会になっているという現実がある。総合型選抜、自己推薦選抜を受験することを通して、学んでいく生徒に伴走するのが先生方だと思う。学校外のことだから、自己推薦なんだから自分だけでやりなさい、という訳にはいかないということ、中学校の先生方にも認識してもらいたいと思う。

〔梅津 委員〕

スクール・ミッション、スクール・ポリシーに関して、多くの委員は具体的なイメージがなかなか湧かなくて、そして、それと入試がどう結びつくのかというところが、もやもやしているのではないかと思う。高校では、すっきりし始めてきて、今はスクール・ポリシーの策定作業をやっている。進捗状況は現在3割か5割ぐらいで、令和4年度の早い段階にはほぼ完成形になるスケジュールで作業を進めている。

先ほどの参考資料5のスクール・ミッションのところには、設置者の県教委がつくるスクール・ミッションは、高校に期待される社会的役割を「再定義する」とある。全く新しいものを作るというのではなく、その学校の歴史や特徴、教育目標等を見て「再定義する」ということである。

それを踏まえて各高校でもスクール・ポリシーを作る。例えば、本校では現在の校訓や教育目標は変えないつもりでいる。令和4年度の高校の新学習指導要領のスタートやスクール・ポリシーの策定に合わせて、教育目標も変えるという考え方もあるが、大本のスクール・ミッションが「再定義」されるものなので、本校としてもスクール・ポリシーの元になる教育目標は変えないつもりで作業している。なので、高校としての指導方針がガラッと大きく変わるというものではない。もちろん、魅力化や総合的な探究の時間の取組が、明確に分かりやすく動いていくということにはなる。

資料1に、現行の推薦入試、一般入試の資料がある。一般入試のところで、「約8割の学校・学科で志願倍率が1倍を下回っており、一定の基準を満たす志願者が入学できる状態である」とあり、従って、「多様な選抜を行う必要性は限定的である」とある。これは一般入試に限ったことではなく、多様な選抜を行う必要は限定的だというのは推薦入試にも当てはまる。

資料2には推薦入試の経緯や推移があるが、今の推薦入試は平成19年度にスタートしたもので、もう15年ほど経っている。これから、令和7年入試に向けてとなると、20年近く経つことなる。

この間に社会の様々なことが変わってきていて、その1つは、激しい少子化、生徒数の減少である。なので、平成19年頃に行っていたのが、その理念とか、スクール・ポリシーとの関係とかもあるが、現実的に、推薦入試をやる意味があるのかどうかという根本の部分を考えるべきだと思う。

この10数年間の中でもう1つ変わってきたのは、先ほどから話に出ている部活動への取組で、平成19年頃はほぼ全員加入だったと思うが、今は、逆にほぼ100%自主的、自発的、任意の取組となってきていて、今の推薦入試制度は、その変化に対応しきれなくなっているの見直しの時期なのだと思う。

推薦入試についても必要性が限定的である。例えば、実施するにしても一部の学校でとか、あるいは、もう全県的に廃止するとかという根本的な議論も出てくるのではないかな。

〔山田 委員〕

推薦入試の廃止も含めてという、何かそういう流れが来ているような感じがするが、参考資料1の3ページによると平成16年度に推薦入試は一度廃止になっている。この時は、それまで300点満点だ

った学力検査が500点満点になったり、英語の応答試験が入ったりと非常に大きな変革で、中学校も高校も大変だったと思う。4ページを見ると、推薦入試は平成19年度から再開されている。廃止していたのは3年間だけだった。

今回、本当に推薦入試は必要なのかどうかと、子供たちの状況に応じて考え直すのはいいが、廃止の方向で考えるならば、なぜ平成16年度に廃止しわずか3年で再開したのか、その背景を明らかにしないと、また廃止しても、やっぱり必要だ、学校の活性化にぜひ行って欲しいという議論が再開しかねないと思う。推薦入試そのもののあり方を議論するのであれば、平成16年度の廃止から平成19年度の再開のところを検証しなければならないのではないかと。

[菊地 主任指導主事]

平成16年度から推薦入試が一旦廃止となったが、この時は推薦入試をやめようということではなく、ABC選考のB選考、調査書や面接等をより重く見ようという選抜が、十分に推薦入試に変わり得るのだということで、推薦入試の趣旨を否定するのではなくて、趣旨を生かしながらB選考で代替するという形での改革が行われたと記録には残っている。

その後、やはりB選考では推薦入試の代替とはなっていない、趣旨を残したということだったが違ったのではないかと、2代前の入試改善検討委員会で検討し、再開すべきという提言があり再開した。平成16年度に制度として廃止したが、このときに推薦入試はもう不要だという議論がされた訳ではないということである。

[鎌田 委員]

推薦入試制度について検証はされているのか。クラブ活動はみんなやっているわけでもなく、そういう人たちだけを大会成績で選抜するのは、不公平だと思う人もいる。今まで行ってきた中で、学校現場が活性化しているとか、お互いに刺激し合いながらスポーツをやっていた子供がその学校でスポーツに馴染むようになったとか、学校全体で推薦入試制度がプラスになったとか、そういう評価を検証し、だから推薦入試は必要なのだという考えになっているのだと言われると、私も腑に落ちて、推薦入試が必要なのだと思う。

その辺りのデータ取り等も含めて、検証などを行っているのか伺いたい。

[須川 高校教育課長]

推薦入学者の入学後の活動歴等を県として追っているものはない。ただ、各高校では、推薦入学者がどのように3年間で活躍し、どのような進路に進んだかということは把握している。各高校から推薦入試の有意性についての意見は集約していないところである。

我々の考えとして、一般入試は学力検査中心だが、それだけではなく、生徒の持ち味が最大限に生かされて選抜する方法として、1人の生徒を多面的に評価する方法として推薦入試はあると考えてきた。資料を見ても分かるように、全国では様々な入試のやり方がある。それを、今の岩手の現状なども踏まえながら、何が一番いいのかを委員の皆様から意見をいただき、新しい制度に向かっていければと考えている。

今の推薦入試は学校長推薦で、全員が2度受検できるということはないが、例えば、自己推薦ということになれば、全員に2回のチャンスが与えられることになるとも考えられる。そういったことも含めて、時代背景や部活のこともあるが、二度の機会というものをどのように形作っていったらいいかを委員の皆様から意見をいただければと思う。

[佐々木 委員長]

時間も差し迫っているところなので、次の議題に移りたい。

(3) 一般入試のあり方について

[菊地 主任指導主事]

【資料1「Ⅱ 県立高校入試改善の論点」について、資料2「Ⅱ 現行の一般入試」「Ⅲ 全国の入試制度」について触れながら説明】

[佐々木 委員長]

質問や意見をいただきたい。

[小山田 委員]

資料2の「平成28年度入試から令和4年度入試の選抜方法の推移」で、①のA選考100%の学校が2倍ぐらいいに増えているが何か理由はあるのか。また、②から⑦の選考方法について、それぞれこうでなければならない理由などはあるか。

[菊地 主任指導主事]

選抜方法を変える理由を調査しているわけではないが、背景としては志願倍率が1倍を切っていることだと考えられる。70%をA選考で選抜して30%は違う選抜をずるとしていても、定員の70%以上の志願者がなければ2つ目の選抜は行われぬ。40人定員のところに35人の志願者があって、様々な方法で見るという必要性が限定的になっているというのが、各高校の事情ではないかと考えている。

また、平成28年度のときに③が多かったのは、前年度までの入試制度の選抜方法であるABC選考をすべてやる方法に最も近かったからではないかと考えている。

[村上 委員]

昨年度入試では新型コロナウイルス感染症の影響で、一般入試では面接を行わなかったが、それについて、学校現場の方からの評価が分かれば教えてほしい。

また、論点のところ、どんなに魅力的な選抜制度にしたとしても全県立高校で志願倍率が1倍を超えるということは現実的には考えられないことである。志願者が0とか倍率が1倍を下回るところがだいたい出てきているところが気になるが、各県立高校が特色を出して努力をしていることは県教育委員会も承知していると思うが、志願倍率が1倍を下回っているのは高校が努力をしてないということでは決してないといこうことを申し上げたい。

[須川 高校教育課長]

昨年度は一般入試では面接を行わなかったが、各高校からは「困る」、「面接をやって欲しい」という意見はきていない。新型コロナウイルス感染症の影響とは異なる観点から、面接の意義について、一般入試の中で面接を行うべきか、それとも廃止しても構わないかということ、各委員の意見をいただきたい。

[浅沼 委員]

質問というよりは感想になるが、入試改革で何をしたいのか。8割の学校・学科で定員に満たされていない状況だが志願倍率を上げたいという意味でこの入試改革をしたいのか。今のやり方が教員、中学校、生徒に分かりづらいつころがあるから、分かりやすくなるようにしようということなのか。

大学で今苦勞しているところは、アドミッション・ポリシーを作つて、それに合う問題を作ることである。スクール・ポリシーを作つて、それに合わせた生徒に入学してもらいたいならば、それに合った問題を作らなければならないということになる。しかし、手間を考えるとそれは無理である。

何を検討するのか、今抱えている課題を整理してみんなの納得をどこに持っていくか、いろいろな要素が入つて話をしてるので訳が分からない印象だ。最初にスクール・ポリシーの説明があつたが、あまり関係ない感じがする。それよりは、今の入試制度で、推薦の方法であるとか、面接の方法として5分でいいのか、10分や20分にするかということを検討するのか。

根本的に5教科の学力検査も無しにするほどの大きな改革をするという話はあるのか。

内容がごちゃごちゃしていて、頭が混乱してしまった。要するに、今定員に満たないところを満たすようにするための入試改革ではないということでしょうか。

[須川 高校教育課長]

定員を満たすようにするために入試改革を行うということではない。

県立高校入試の目的として、生徒一人一人の多様な能力を評価できる形とすることが大前提としてある。ただ、こちらから最初から論点を細かく示しすぎると議論を誘導してしまうと考え、今回は、では何をやるのかということになってしまった。次回は、今回の意見を受けて、論点をはっきりするような形にして進めたい。

[佐藤 氏（大柏委員の代理出席者）]

一般入試のところで、推薦入試をどうするかという話がメインになっていることが疑問に思う。一般入試の学力検査の科目数や試験時間、問題のレベルについて、大学入試が変わると高校の教育の内容が変わるように、高校入試が変われば中学校の教育が変わるというように、大きなメッセージになると思う。

もし、岩手県の学力向上を考えるのであれば、推薦入試をどうするかということよりも、一般入試に今言ったようなことが論点にあるべきだと思う。私は、そういうところまで話し合う方が、面接をどうするかよりもいいと思う。

[須川 高校教育課長]

最初の議題が推薦入試であったために、一般入試をなおざりにしているような印象を持ったのかも知れないが、決してそうではない。もちろん、高校3年間の学びの後に、進学したり就職したりして社会に出ていくので、それに必要な知識などは身に付けなければならないし、その元として義務教育段階で学んだことが測れる入試はやっていくべきである。ただ、学力向上ということであれば、入試も関係するが、別の機会に時間をかけて話し合うべき部分が多い。

学力向上に関係することとしては、これは本日の議論になっていないが、入試日程での岩手県の課題として3月の過ごし方というものが中学校でも高校でもある。この委員会では、学力向上の1つの方向性として、そのことも議論いただきたいと思っている。

[松葉 委員]

資料2の5～6ページに一般入試の経緯がよく分かるように書かれている。平成16年度に推薦入試が廃止になり、ABC選考が始まった。ABC選考には推薦に代替するような選考があるから、平成19年度までの3年間は推薦入試はやらなかったと捉えた。今行っている一般入試ではABC選考で7通りの方法があるということは、ここでもう、推薦入試ではないがその意図による入試がなされているということではないかと感じる。そうであれば、今行っている本県の入試の一般入試だけでいいのではないか。

もともと現在の一般入試だけだったと考えて、もう推薦の意図も入っている選抜制度であるならば、これだけ十分じゃないか。3年間止めていた推薦が再開したのは、理由やメリットがあつてであり、現在は1月には推薦入試、3月の一般入試をやっている。一般入試のあり方や選抜制度が要件は満たせば、一般入試だけで十分という議論もあるのではないか。

[佐々木 委員長]

今までの意見を総合すると、現行の入試制度の本体である一般入試のやり方に何か問題があるのか、どういうところを変えなくてはならないかを先に議論した上で、定員枠が小さい推薦入試について議論をしてはどうかという意見が多かったように思う。

事務局で検討し、次回の議論の柱立てを考えてもらいたい。

(4) その他

[佐々木 委員長]

何か、委員からあるか。

[橋場 委員長]

本日の感想だが、スクール・ポリシーに大分振り回された印象がある。浅沼委員の言うこともその通りだし、梅津委員の策定に向かっているという話もあったが、スクール・ポリシーが定まらないと中学生や中学校が、高校のことを理解できてないということではない。そこは話しておきたいと思う。

中学校では、各高校の特徴について子供たちは勉強していて、本校では、廊下に大分前から掲示をしている。今後の委員会では、スクール・ポリシーにとられる必要はないと思う。

あくまでも入試改善検討委員会なので、一般入試、推薦入試に関わることを中心にと最後にまとめていただいたので、第3回以降はその線に沿って進めるということを確認しておきたい。

6 その他

[菊地 主任指導主事]

【資料3「今後の予定」について説明】

[高橋 主任指導主事]

質問や意見はあるか。

(なし)

7 閉会 (高橋 主任指導主事)